

ウクライナ紛争による物流の停滞と、厳しい対ロ制裁に起因する経済面の悪影響が広がる**欧州各国**。その負担の増大はもはや耐え難いレベルにまで達しており、各国の国民たちの中に、ウクライナへのネガティブな感情すら巻き起こる事態となっているようです。そんな状況にあって、水面下で「大きな企て」が進んでいると読むのは、元国連紛争調停官の島田久仁彦さん。今回、企ての内容が「**欧州と中国による停戦プラン**」であるとした上で、自身が予見するその**シナリオ**を詳細に記しています。

* **泥沼化するウクライナ戦争と複雑化する国際情勢**

「世界はいつまでウクライナに付き合えるのだろうか？」このような声があちらこちらから漏れてくるようになりました。ニュースでもインターネットでもウクライナ情勢について目にしたり耳にしたりしない日はないほど注目を集めています。伝えられる内容は次第に現在の戦況から終戦後の世界へ関心が移ってきているように思われます。マリウポリのアズフスターリ製鉄所に籠って抗戦していたアゾフ連隊およびウクライナ軍が製鉄所から退避（**ロシアの発表では投降**）し、ロシアがマリウポリを完全制圧したと報じられたことで、一時は退潮が噂されたロシアが巻き返したという見方が出る一方、ロシアが掌握するウクライナ東部ドンバス地方におけるウクライナ軍の抗戦、そして北部ハルキウをめぐる攻防についての情報がでるなど、まだまだ戦況についての報道は健在ですが、次第にウクライナでの戦争による“影響”について懸念の声も聞かれるようになってきました。

例えば、戦争の長期化と欧米諸国による対ロ制裁の強化の影響で引き起こされる【**供給不足からの価格上昇**】は、確実に私たちの生活を圧迫し始めています。国連機関による分析では、**穀物や金属、石油・天然ガスなどのエネルギー資源、木材**といった様々な商品や資源の流通が滞り、またロシア・ウクライナにおける混乱によって物理的な供給が止まる中、**コモディティの物価**がウクライナ戦争発以、**平均で 3 割上昇**しており、今後、このまま戦争が長期化する場合、さらなる上昇が見込まれるとされています。

世界経済は、コロナ禍からの復活基調が出始めていた矢先、再度悪化のスパイラルにはまり、確実にスランプに陥りそうな様相を呈してきました。

イタリアのドラギ首相の表現を借りれば「**私たちは平和か、この夏のエアコンかを選択しなくてはならない**」という厳しい選択を迫られる状況が現実化してきました。ウクライナへのロシアの侵攻が始まった当初は 1 週間ほどで終わると言われていたため、ドラギ首相の表現もさほど深刻に取り上げられてはいなかったようですが、すでに開戦から 90 日余りが過ぎ、様々な対ロ制裁と物流の停滞の影響が、まるでポディプローのように各国の消費者に効いてくることになりました。これまでウクライナへのシンパシーが前面に出ていた各国の消費者の心境にも変化が現れ、冒頭の発言のような「**いつまでウクライナに付き合えるか**」というマインドが前面に出てくるようになってきました。

欧州各国は、今でもウクライナから逃げてくる人たちの受け入れは続いています。が、**電気代や燃料代、そして各家庭の食費の負担が増大**してくるにつれ、自国政府への不満が累積し、プーチン大統領への怒りがこみ上げ、そして間接的にウクライナへの何とも言えない**ネガティブ感情**が巻き起こってきているらしいのです。

「ウクライナの人たちが直面している状況にはシンパシーを感じ、できるだけのことをしたいが、まずは自分たちの生活が成り立たないことには…。」

ところで政府は何をしているのか？

言い表せばこのような心情でしょうか。

戦況が一進一退の状況を繰り返し、戦争の長期化が予想される中、欧米諸国はウクライナへの軍事的な支援のレベルを上げ、一気にケリをつけてしまおうと見せることで、政府に向かう国民からの非難の矛先をかわそうとしているように見えます。

ウクライナの戦力の充実度の裏で、じわじわと【**ウクライナへのシンパシー**】の度合いも変わってきているようです。最近のゼレンスキー大統領の諸国への発言や要求、クレバ外相の【**NATO はまだまだ何もしてくれない**】という発言などにおいて目立ってくるのが、**要求内容のエスカレーション傾向**です。

行動心理学における**“もっと、もっと”**の特徴でもあるのですが、支援を提供しているのに非難ばかりされる状況に直面し、同時に国民からの不満の増大との狭み撃ちの状況に、**欧米諸国政府のイライラ度合いが増している**という情報が寄せられています。

「ロシアをこの際叩かないといけない」

「力による強引な現状変更の試みを許してはならない」

そう感じる半面、高まる一方のウクライナからの要求にたいしての不快感も増大しているという状況が目立つようになってきました。

そしてそこに追い打ちをかけ、各国のリーダーたちが首を傾げだしたのが、ウクライナがロシアに突き付ける【**停戦交渉のための条件集**】の内容です。

「2 月 24 日以前の状態まで戻るまで、交渉のテーブルにはつかない」

一見、当然にも感じる条件なのですが、一进一退を続ける戦況を考えると、かなり強気な要求・条件に感じます。

マリウポリを失い（**いずれ奪還すると言っているが**）、ドンバス地方で反撃を試みるもまだロシアが優勢であることに変わりなく、また“善戦”と言われるのも、ウクライナの兵士および国民の奮闘はあるものの、**欧米からの武器・弾薬・資金の供与**があったこと。

それも、日本も含む国々の血税を投入してもらった上での善戦であり、ウクライナ政府およびゼレンスキー大統領が威張ることでもないはず。

そして支援しても、返ってくるのは、さらなる要求と「**まだまだ全然足りない。このままだとウクライナ、そして民主主義はロシアの悪の手に堕ちる**」という、欧米諸国が断りづらい痛点を突いてくる。

ゼレンスキー大統領の話術、プレゼンテーション能力を絶賛する風潮が報道で目立つ中、欧米諸国の政府は**徐々に“違和感”が“確信”に変わり始めている**ようです。

その“確信”の内容は何でしょうか？

代表的な声の内容は

「今回の件でプーチン大統領が悪く責められるべきなのは確かだとしても、そもそも過去 8 年にわたり、何も効果的なことが出来ず、このような惨状を招いたことについては、どのように考えるのか？」

「支援を受けておいて、非難するとはどういうことなのだろうか？」

「我々が供与した武器弾薬が行方不明になっているが、どのような説明をするつもりだろうか？」

「気持ちは分からなくもないが、**ウクライナによるロシア軍捕虜への蛮行・虐待、そして殺害**について、我々がこれ以上目をつぶっていることは適切と言えるだろうか？」などいろいろな疑問や違和感を示しています。

私にとっては、かつての旧ユーゴスラビア・ボスニアヘルツェゴビナでの惨憺たる状況を前に、欧米諸国、特に**英国の情報・メディアキャンペーン**で**クロアチアを悲劇のヒロイン**に仕立て上げ、ミロシェビッチ大統領率いるセルビア共和国を“悪”に仕立て上げた状況を思い出してしまいます。

ミロシェビッチ大統領およびその仲間たちが行った蛮行は決して肯定することはできませんが、クロアチア政府がセルビア人に対して行った数々の残虐行為は、見事に覆い隠されたことについては、大きな違和感を今でも抱いています。

そして今、ロシアとウクライナの間で行われている戦いを描写する様々な情報を前に、**ユーゴスラビア内戦の際と同じ企てが進行しているように**感じてしまいます。

しつこいくらい繰り返しますが、私はプーチン大統領およびロシア軍がウクライナに侵攻し、民間人に対する蛮行を働くことに対して全くシンパシーを感じません。

しかし、「悪いロシアが一方向的に罪なきウクライナの権利を蹂躪した」という描写にはとても大きな違和感を抱きます。

そして、その**イメージづくり**の片棒を担ぐ**欧米諸国の方針と戦略**が全く変わっていないことにも大きな疑問を抱きます。

残念ながら、これまでは見事なまでに策が奏功しています。

ただ、ここ最近になって、少しずつボロが始め、欧米諸国のゼレンスキー大統領およびウクライナ離れが加速し始めています。

旧ユーゴスラビアでの内戦・分裂時の悲劇のヒロインであったクロアチアと、**今回の悲劇のヒロイン**であるウクライナとの違いは、**どこまでそれを演じられるか**

というところでしょう。

クロアチアはセルビアに劣らないレベルの蛮行を行ったにも関わらず、従順に欧米、特に英国が描いたイメージ戦略に沿った言動をし、見事にセルビア共和国のミロシェビッチ大統領を極悪人に仕上げました。

それに対し、ウクライナ政府とゼレンスキー大統領は、過信なのか、自らの失敗を覆い隠すための言行なのかは知りませんが、最近になって、味方であるはずの欧米諸国およびNATOに対して不満を述べ、「[くれくれ](#)」[要求を繰り返す](#)中、少しずつサポーターを失い、馬脚を露していることに気づいていないようです。

欧米諸国はそれでもまだ、自国の利害に沿ってロシア叩きに興じていますが、その行動を支える理由が、ウクライナへのシンパシーから、[プーチン大統領および強国ロシアを排除した後の新国際秩序の構築と、自国の利益拡大の機会最大化](#)に変わってきているようです。

ウクライナの“友人”であるはずの欧米諸国もそれぞれに思惑があり、決して一枚岩でないことは皆さんもお気づきの通りです。

では大きな違いと、水面下で進む大きな企みはどのようなもののでしょうか？

あくまでも“推論”という形でお話ししたいと思います。

ここでのプレイヤーは、[ロシア](#)、[欧州各国](#)、[NATO加盟を目論むスウェーデンとフィンランド](#)、[中国](#)、[日本](#)と[米国](#)です。

ポイントは、

【[不気味に沈黙する中国政府](#)】

【[脱ロシアにかかる時間に対して、自らの経済安全保障を守るのに必要な時間が長くなることに気づいている欧州各国](#)】

【[そしてロシア・ウクライナと地続きで存在する欧州と、紛争の炎の飛び火を恐れる欧州](#)】

【[これまでの安全保障方針を転換し、NATO加盟を急ぐスウェーデンとフィンランの思惑](#)】

【[ロシアを警戒しつつも、ロシアを取り込んだほうが利益が大きいことを確信している中国](#)】

【[ウクライナに大きな利害を有しないが、アメリカと歩みを共にすることで安心を得ようとする日本](#)】

そして

【[国内情勢の都合上、ウクライナへの支援と、中国の台湾への野心を強調することで、支持率回復を狙うアメリカのバイデン政権](#)】

という複雑なコンピネーションです。

さて、その“推論”とはどのような内容でしょうか。あくまでも推論ですが、お付き合いくださいね。

【[中国の習近平国家主席ルートを通じてプーチン大統領にコンタクトし、中国と欧州諸国とウクライナで停戦協議を行なう](#)】

というのが一案です。

ここでは[まじめにウクライナの後ろ盾をする日米は置いてきぼり](#)になります。

欧州は中国と共に条件を提示しますが、その内容はどのようなのでしょうか。

【[ロシアによるクリミア半島の実効支配はそのままにして認め、ドンバス地方の帰属については継続審議対象とする](#)】

【[プーチン大統領・ゼレンスキー大統領ともに大統領を辞任する。プーチン大統領については、辞任はしても逮捕対象にはしないことで身の安全を一応保障する](#)】

【[ずたずたになったウクライナの戦後復興は中・欧で仕切るが、日本とアメリカもうまく巻き込んで、負担をシェアする](#)】

【[突然のように最近湧いてきて、かつ異例のスピードで加盟申請の話が進むスウェーデンとフィンランドが、トルコによる頑なな反対と揺さぶりを理由に「このような非常に時にNATOの結束を乱すわけにはいかない」とでも言って、NATO加盟申請を取り下げ、プーチン大統領に配慮したかのように見せかけ、停戦交渉のテーブルに就かせる](#)】

【[中国は仲裁者としての功績をアピールし、ウクライナの戦後復興で濡れ手に粟](#)】

【[欧州は、ロシアと微妙な仲直りをする一方で、エネルギー安全保障を回復し、危機を乗り越えたとアピール](#)】

【[中国と欧州各国との確執も、一旦棚上げにし、それぞれの経済安全保障の回復と確保に動く](#)】

といったシナリオはいかがでしょうか？

「ただの妄想」と思われるかもしれませんが、少しでも「ちょっと待てよ…もしかして」とお感じになったなら、このまま一緒に想像してみてください。

この場合、一見、日米は出し抜かれてしまうように見えますが、実は負けてはいません。

[日本](#)については、賛否両論ありますが、国際安全保障問題でこれまでにないほど踏み込んだ対応をすることで、[G7内での信用度は上がった](#)と思われま

そして、[ウクライナの戦後復興](#)に関わり、かつロシアの経済的なスランプに対しても手を差し伸べることで、[対口関係で強い立場に立つ](#)ことが出来るかもしれません。

[アメリカ](#)についていえば、[11月の中間選挙](#)を控えるバイデン大統領と民主党にとっては逆風が国内で吹きかかぬませんが、ウクライナ戦争への積極関与を通じて、[米国産の武器弾薬](#)がたくさん供与され、実戦を通じて大規模な武器見本市を実施することで[軍需産業および関連のセクターに大きな利益](#)をもたらすことになり、必ずしも出し抜かれて損をしたとはいえないかもしれません。

では、ゼレンスキー大統領はどうでしょうか？こちらもまた安泰でしょう。

支持率が一桁にまで沈んでいた惨状から、

【[強大な敵と不条理に対してひるまずに戦う戦時大統領](#)】

【[家族と離れ離れになってもウクライナのために命を賭して戦ったリーダー](#)】

【[被害にあう国民の惨状に涙する優しいリーダー](#)】…

彼のリーダーとしての今後は、しばらくは保証されると思われま

今回の案件でロシアとウクライナの仲裁役を買って出ること外交的な得点稼ぎを狙った[トルコ](#)も、仲裁役のお株は奪われてしましますが、NATOをめぐりやり取り“劇場”を通じて、ウクライナ問題とは直接的に関係がない[クルド人問題を提起・主張するチャンス](#)を得ると同時に、しっかりと[第3極](#)として国際情勢におけるメインプレイヤーグループに立ち位置を確保することに繋がります。

あまりにもできすぎた絵空事だと思われるかもしれませんが、何だかあり得るような気もしませんか？

とはいえ、この妄想には[唯一の敗者](#)が存在してしまいます。

それは皆さんもお考えの通り、[生命財産を奪われたウクライナの一般市民](#)でしょうし、リーダーの明らかに行き過ぎで、強引すぎる振る舞いのせいで、[世界中で嫌われ者にされてしまったロシアの一般市民](#)です。

そして、間接的に、[高い経済的コストを強いられることになった世界の消費者たち](#)でしょう。

ここ最近、いろいろなところから提供される情報をベースにした分析を加えて、今回、ため息をつきながらいろいろと書いていますが、この妄想とも批判されるかもしれないシナリオが発動されるまでには、まだちょっと時間が掛かりそうな予感がしています。

以上、国際情勢の“裏側”でした。